

慶應 SFC 学会 御中

愛媛県及び宮城県における病児学習支援の地域構造の解明
～学生ボランティアによる病児療養児に向けた学習支援の可能性～

総合政策学部4年 井上雅代

【フィールドワーク実施日程】

愛媛県 2023年9月5日～9月8日 認定NPO法人ラ・ファミリエ
愛媛大学医学部チルドレンサポーターズ訪問
宮城県 2023年8月26日 東北大学医学部/東北大学病院訪問

【活動の目的】

本調査では、全国どの地域にある病院においても『入院中の子どもたちが「学びの場」に集うことができる社会の構築』の一助になることを目的にフィールドワークを行った。特に、学生主体の病児学習支援プロジェクトに焦点を当て、愛媛大学医学部の学生及び東北大学医学部の学生における病児学習支援の支援構造を明らかにすることを目的とした。学生ボランティアによる学習支援がどのように行われているのか、病児を取り巻く周囲の意識、病児療養児の教育環境、地域資源について考察をした。また、【四国ブロック】と【東北ブロック】の地域的な差異にも着目し、市内の病院（医療機関）、NPO法人、大学の教員・学生（医療系学部など）などが連携し、病児の「学びの機会」をいかにして”地域が一体的に提供しているのか”、その取り組みや仕組みに関するインタビューを実施した。愛媛大学医学部及び東北大学医学部における病児教育の考え方や他職種連携の実態について考察を深め、学生ボランティアによる病児療養児に向けた学習支援の可能性の示唆を得ることを目的とした。

【活動の概要】

本活動は秋山美紀研究会チルドレンケアラー班に所属する学部生6人（環境・総合・看護）が愛媛県・岡山県を訪問し、病児学習支援に携わっている学生、大学教員、認定NPO法人のスタッフに半構造化インタビューを行なった。愛媛県におけるインタビュー協力者は、女性4名、男性1名の合計5名で、内訳はNPO法人支援相談員2名、愛媛大学教員1名（教育学部・医学部）、愛媛大学医学部生2名であった。宮城県におけるインタビュー協力者は男性1名で東北大学病院内の見学も行った。

【活動の成果】

1. 愛媛県訪問の成果

①学習支援活動を行う学生とNPO法人との連携

愛媛大学医学部チルドレンサポーターズは医学部公認のサークルであり、入院・療養中の子どもたちに向けた学習支援活動を行っている。認定NPO法人ラ・ファミリエは、学習支援を行う学生の研修を実施したり、子どもと学生のマッチングを行うなど、学習支援の活動を行う環境を整えている。学生ボランティアは、NPO法人と連携することについて「わからないことや悩みをLINEなどで親身に聞いてくださったり、悩みを抱えている学生ボランティアが集まる相談会を作ってくださいたりしています。」と話していた。いつでも相談できる大



人が近くにいることが、学生が安心して入院中の子どもたちへの学習支援を行うことに繋がっていることが示唆されるだろう。

②学習支援活動を行う前の研修制度

認定NPO法人ラ・ファミリエは、全6回の研修期間と個人面接の機会を設けており、チルドレンサポーターズの学生は初年度にこの研修を全員受講している。学生が学習支援を行うまでの流れとしては、病院からの相談・紹介、またはご本人や保育者等からのご相談があった際に、初めに認定NPO法人ラ・ファミリエの自立支援員が面談を行い、その後ボランティアとマッチングが行われる。個人面談の際には、どのような子どもなのか、またどのような学習支援が必要なのか、今の状況について知る機会とし、子どもと学生のマッチングに繋がっている。マッチングが成立後には、“ご本人・保護者・自立支援員・ボランティア”での顔合わせを行い、認定NPO法人ラ・ファミリエとの体制と連携できる状況を整えてから学習支援活動を行うようになっていることが印象的であった。

③学習支援を行う学生の意識

学習支援を行うにあたって大切にされていることをインタビューした。研修や講演会でのお話を通じて、医学部生としての立場を考えたときに、親でも学校の先生でも医療従事者でもなく「大学生のお姉さん」であることを軸に考えていると話していた。この点について認定NPO法人ラ・ファミリエは、子どもたちの「その子らしさ」を引き出せるようにすることも大切にしていると話していた。ボランティアが真面目すぎてしまうと、子どもたちも硬くなってしまう。“そうでなくても良いんだ”と思ってもらうことによって「その子らしさ」を大切にしていると話していた。

2. 宮城県訪問の成果

①長期療養中の高校生に対する学習支援の重要性

東北大学高校生学習支援サークルは、東北大学医学部に所属する学生が、学習支援を希望した高校生に対して、学校で使っている問題集を活用しながら支援を実施している。この取り組みが始まった背景として、小中学生と違い、高校には院内学級がなく高校生に対する学習支援が不十分であったことが挙げられる。それにより高校によっては留年にならざるを得なかったり受験を諦めてしまう患者さんもいたという。サークルが発足してから2022年までに20名近くの学習支援を行い「学習や進学に不安を抱えていたけれど、大学生の方と一緒に勉強することで、質問もしやすく勉強への不安が軽減した」といった声が寄せられたそうだ。

②学習支援を行う学生の意識

学習支援を行う学生さんは、これから活動をしていく中で、病院の子どもたちにとって学生メンバーは、なんとなく頼ることができて話せる「近所のお兄ちゃん・お姉ちゃん」のような存在になりうると感じていると話されていた。また、先生とか普段いる大人でもない、ただ勉強を教える人でもない「ちょっと悩みも聞いてくれるお兄ちゃんお姉ちゃん」みたいな感覚にもなれたら良いとお話しして下さった。

【謝辞】

本研究の実施にあたり多大なご協力をいただきました、愛媛県認定NPO法人ラ・ファミリエ・愛媛大学医学部チルドレンサポーターズ訪問の皆さま、東北大学医学部の皆さまに心から御礼申し上げます。また、終始ご指導いただきました秋山美紀先生、ご支援いただきましたSFC学会に深く感謝申し上げます。